

## ■ 米国経済の好調はいずれドル買いにつながる！？

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

本日(1/4)、2018年の「大発会」が行われ、日経平均株価は寄り付き段階から昨年末比+300円超の大幅高。あらためて2万3000円の大台に乗せてのスタートということで、まさに新年の幕開けに相応しい華やかな展開となっている。

その背景には、先んじて幕開けした米株市場でNYダウ平均が1/2、1/3と続伸し、この2営業日で200ドル超の上げ幅となったことがある。足下の原油高で米エネルギー株の値動きが好調なこともあるが、振りかえれば2017年の年末商戦において小売売上高が大きく伸びたことなども確認されており、全体に米国経済の成長が加速し始めていると感じられることが大きい。

既報のとおり、米大手マスターカードによれば、2017年11/1~12/24までの小売売上高は前年同期比で+4.9%であった。こうした好調な個人消費支出の伸びが米国の10-12月期GDPに反映されるのは間違いないと思われ、1/26に予定される「速報値」の発表が待ち遠しい。

また、米大統領は1/30の一般教書演説までに“1兆ドル超”の規模とされるインフラ整備計画を打ち出すとしており、関連トークがドル買い材料視される局面が訪れるか注目される。

昨年末のように、時期的な要因でポジション調整およびリバランスのためのドル売り戻しが出てきているような局面においては、税制改革の実現やインフラ整備計画について財政赤字の拡大などといった懸念材料ばかりが取り沙汰され、なかなかドル買い材料に結びついて行かない。しかし、年があらたまってドル売り調整一巡、ドル買い基調回復といった局面が訪れれば、今度は税制改革や大規模インフラ整備の景気刺激的な効果の方にむしろスポットライトがあたることもあろう。

一方、テクニカル的な観点ではドル/円について、まず昨年12月の月足・終値が結局のところ31カ月線を上抜けることができなかった点を再確認しておかねばならない。果たして、いつまで31カ月線がドル/円の上値抵抗として立ちはだかり続けるのか今後も要注目である。

次にドル/円の週足に目を転じると、下図にも見られるとおり、足下のドル/円の下値付近に62週線や31週線、一目均衡表の週足「雲」上限などといった重要な節目が集中している。これらは、かなり強めのサポートとして機能しているようであり、とりあえず112円前後の水準というのは底堅さが感じられるところとなっている。



また、2015年6月高値から以降の高値を結んだレジスタンスライン（上図中・青色点線）が今後さらに水準を切り下げてくることにより、そろそろ同ラインを上抜ける場面が訪れてもおかしくないという点にも注目しておきたい。クリアに上抜ければ、そこからムードが一変する可能性もあると思われる。

(01月04日 12:25)